民族的好悪とその人格的要因*

熊 本 大 学

葛 谷 隆 正**

I 研究目的

人はだれしも平和な社会・平和な世界を常に念願し、その実現のために絶えざる努力と協力を続けているといつてよい。それにもかかわらず現実はその念願が容易に実現されそうにもなく、かえつて人間相互間・国家相互間の関係はますます相剋葛藤の度を加えつつあるかの観を呈し、心からの平和への念願も単に彼岸の夢に終わるのではないかとさえ疑われるのである。しかしやはり人は永遠に人類の平和な世界の実現をめざして、永久の努力を続けていくことと信ずる。

さて、わたくしはさる昭和29年9月、「諸民族に対する好悪の態度」に関する研究を試み、その結果を本誌第

3巻に発表したが、あれから5年の歳月が経過した。その間、内外の情勢は依然として刻々目まぐるしい変化を続け、特に民族独立運動や原水爆・原子力の問題を中心とするさまざまな世界平和建設のための国際的努力も東西両陣営の考え方の相違対立による国際緊張を容易に緩和しそうにない。このような情勢のさなかに生活する学生は、はたしてどのような民族的好悪感を抱いているであろうか、それは5年前のものに比してはたしてどのような変化を示すであろうか、さらにこうした民族的好悪は人格的構造とどのような関係をもっているであろうか、これらの問題にささやかな光をあてようと試みるこれが本研究の目的である。これを要約すると次の3つとなる。

I 今日の大学生のもつ民族的好悪は5年前のそれと

—質問紙内容—

男・女 年令 ()

民族名	1	2
1 フィリピン人		
2 トルコ人		
3 フランス人		
4 ビルマ人		
5 スイス人		
6 イギリス人		
7 黒人		
8 インド人		
9 ブラジル人		
10 アメリカ人		
11 インドネシア人		
12 シナ人		
13 イタリア人		
14 ロシア人		
15 オーストラリア人		
16 日本人		
17 ユダヤ人		
18 朝鮮人		
19 ドイツ人		
20 アイルランド人		

(1)……各民族に対する好悪を、好きなものから順次 1. 2. 3……と20まで順位づけよ。順位のつけにくいものは同番号で示せ。

(2)……各民族を、日本人と比較して、その優劣を、下の記号によつて示せ。
非常に優れている…3 非常に劣っている…3 どちらともいえない…0
かなり優れている…2 かなり劣っている…2 分らない……………×
優れている方……………1 劣っている方……………1

(3)……次の中、自分に一番適当していると思うものに○印をつけよ。

- 私は自己嫌悪や自己劣等感に非常に悩まされる。
- 私はそれにかかなり悩まされる。
- 私はそれにある程度悩まされる。
- 私はそれにあまり悩まされない。
- 私はそれに殆んど悩まされない。
- 私はそれに全く悩まされることはない。

(4)……次の意見の中、最も賛成と思うものに○印をつけよ。

- 人は人種・国籍・性別・能力・身分の如何にかかわらず全く平等に遇せられるべきである。
- 人はそれらの点に違いがあるので、待遇に若干の差があつて然るべきである。
- 人はそれらの違いに応じた待遇をうけるべきである。
- 人はそれらにかかなり大きい違いがあるので、待遇も相当に違つていべきである。
- 人は凡ての点で全く違つているので、待遇も完全に違つていべきである。

* Interracial preferences and their personality determinants.

** by Kuzutani, Takamasa (Kumamoto University)

比較していかに変化しているか。

II 民族的好悪と民族に対する優劣観。

III 民族的好悪と人格の構造との関係。

II 研究手続き

- (1) 被験者 熊本大学教育学部1・2年の学生 232名でこれを性別・年齢別に示せば次のとおりである。調査

被 験 者 数

性別	18才	19	20	21	計	平均年齢
男	55	43	5	3	106	18.58
女	59	54	13	0	126	18.64
計	114	97	18	3	232	18.61

は昭和34年7月初旬である。

- (2) 方法 別表のような質問紙を配布し、集団的に行なった。所要時間は約30分。あまりむつかしく考えないで頭の中に浮んできたありのままを卒直に書くようにと特に念をおした。

III 結果と考察

I 大学生の民族的好悪ならびに以前の研究結果との比較

- (1) 各民族に対する好悪順位の分布状況

各民族に対する好悪順位の分布状況を%（各順位ごとに $\frac{100f}{N}$ を算出）で示すと Table 1 のようになる。

Table 1 各民族に対する好悪順位の分布状況

民 族	順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
フィリピン人		0.0	0.5	0.0	0.5	0.0	1.8	5.1	5.1	4.1	10.1	7.4	9.2	9.2	9.7	7.8	10.6	6.4	8.7	4.1	0.0
トルコ人		0.0	0.0	0.0	0.9	0.5	0.9	2.8	1.8	3.7	6.0	10.1	10.1	15.2	12.0	13.8	9.7	5.5	3.2	3.2	0.9
フランス人		4.5	10.0	12.7	17.6	17.2	9.1	4.1	5.0	3.6	2.7	3.6	1.4	2.7	0.9	1.8	0.5	0.9	0.5	0.5	0.9
ビルマ人		0.0	0.0	0.9	0.0	0.9	0.9	1.4	1.8	6.4	9.7	6.4	8.7	12.0	15.2	10.1	8.3	9.7	4.1	3.2	0.5
スイス人		11.3	18.6	13.1	15.8	10.9	6.8	7.2	4.1	1.8	2.3	2.3	1.8	2.3	0.0	0.0	0.5	0.9	0.5	0.0	0.0
イギリス人		9.9	12.1	19.3	13.0	13.4	8.5	4.9	4.5	0.0	2.2	1.8	2.2	0.9	0.5	1.3	1.8	0.9	0.9	1.3	0.5
黒人		0.9	0.9	0.5	1.4	0.9	3.2	3.2	1.8	4.5	3.6	4.5	6.4	9.5	9.1	6.8	8.2	9.5	11.4	6.8	6.8
インド人		0.0	2.8	2.8	2.3	7.4	6.5	8.3	6.0	8.3	6.9	8.8	3.7	6.9	10.6	7.4	4.1	3.7	1.8	1.8	0.0
ブラジル人		0.0	0.5	0.9	3.2	2.7	4.5	7.2	8.6	10.0	6.8	8.1	10.9	9.1	10.0	5.0	3.6	5.4	1.8	1.8	0.0
アメリカ人		1.4	6.3	12.2	12.7	10.4	11.8	8.1	5.9	4.1	3.2	1.8	3.2	1.8	3.2	1.4	2.3	2.3	3.6	1.4	3.2
インドネシア人		0.0	0.0	0.9	0.5	0.9	2.3	1.8	0.9	2.8	5.5	5.1	8.8	13.4	13.8	12.4	14.3	9.2	4.1	2.8	0.5
シナ人		0.0	1.4	0.9	3.2	1.4	1.4	1.8	1.8	2.3	3.2	4.5	2.3	3.6	4.5	8.6	4.5	8.6	12.3	20.9	12.7
イタリア人		1.8	6.8	6.3	9.1	7.7	13.1	9.5	14.0	2.7	6.3	8.6	2.7	4.1	4.1	1.4	0.0	0.9	0.5	0.5	0.0
ロシア人		0.5	1.4	2.3	1.4	1.8	3.7	5.5	4.1	6.9	3.2	6.4	3.2	2.8	4.1	5.1	5.5	5.5	12.4	12.4	12.0
オーストラリア人		0.0	0.0	2.7	2.3	1.8	3.7	7.3	9.6	6.8	7.8	7.8	10.0	6.4	7.3	5.9	5.5	5.0	1.8	5.9	2.3
日本人		47.1	13.0	8.0	8.5	7.1	4.0	1.8	2.2	0.5	0.9	0.0	0.9	0.0	0.5	0.9	0.9	0.5	0.5	1.8	0.9
ユダヤ人		0.0	0.9	0.9	3.2	1.4	1.8	0.9	2.8	1.8	5.5	5.5	6.5	10.6	6.9	5.5	9.2	10.1	9.7	11.1	5.5
朝鮮人		0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	0.0	0.9	0.0	0.5	0.9	0.9	3.6	2.3	2.3	2.3	5.0	4.1	11.8	13.6	51.1
ドイツ人		11.8	22.1	12.7	10.9	8.6	10.5	6.8	5.0	2.3	2.7	0.5	1.4	1.4	1.4	1.4	0.5	0.5	0.0	0.5	0.0
アイルランド人		0.5	2.3	1.4	1.8	3.2	5.5	6.0	6.9	10.1	8.3	7.8	14.3	8.3	9.2	5.1	4.1	2.8	0.9	0.9	0.5

それを類型的にみれば、

1. 右傾斜型—日本人、ドイツ人、スイス人、イギリス人、フランス人、アメリカ人
2. 左傾かつ型—イタリア人
3. かつ型—アイルランド人、オーストラリア人、ブラジル人、インド人
4. 右側かつ型—フィリピン人、ビルマ人、インドネシア人、トルコ人
5. 左傾斜型—朝鮮人、シナ人、ユダヤ人、ロシア人、黒人

となつている。これらの結果をさらに後述する好意度順位群と連関させ、昭和29年のものと比較して表示すると下記ようになる。

本研究には他の研究目的のためにあらたにアイルランド人とトルコ人が加えられているが、29年の結果に比して好悪順位の分布状況はだいたい類似した傾向を示していることがわかる。しかし次の諸点においていくつかの変化を見ることができる。すなわち、

1. 以前第3群（左側かつ型）にあつたスイス人が第2群に入り、アメリカ人は同じ第3群に入るが、分

分布型式	29 年 度	34 年 度
1 右傾斜型	日 本 人……第1群 ド イ ツ 人……第2群 フ ラ ン ス 人 イ ギ リ ス 人	日 本 人……第1群 ス イ ツ 人……第2群 ド イ ツ 人 イ ギ リ ス 人 フ ラ ン ス 人 ア メ リ カ 人
2 左側凸型	ス イ ス 人……第3群 イ タ リ ー 人 ア メ リ カ 人 イ ン ド 人	イ タ リ ー 人……第3群
3 波状水平型	シ ナ 人 ロ シ ア 人	な し
4 凸 型	ブラジル人……第4群	イ ン ド 人 ブラジル人 オーストラリア人 (アイルランド人)……第4群
5 右側凸型	ビ ル マ 人……第5群 インドネシア人 フィリピン人 オーストラリア人	フィリピン人 ビ ル マ 人 インドネシア人 (トルコ人)……第5群
6 左傾斜型	ユ ダ ヤ 人……第6群 黒 朝 鮮 人	ロ シ ア 人 黒 ユ ダ ヤ 人 シ ナ 人 朝 鮮 人……第6群

布型式は右傾斜型になつている

2. インド人は第3群から第4群(とつ型)に変わつている。
3. 以前第4群(波状水平型)にあつたシナ人、ロシア人は第6群(左傾斜型)に入つている。
4. さきに右側とつ型分布であつたオーストラリア人は第4群のとつ型分布に変化している。

そして特に注目させられることはシナ人、ロシア人における分布状況のいちじるしい変化である。これらの状況は次に考察する項目で一層明白になるであろう。

- (2) 各民族に対する好意度および好意度順位

各民族に対する好意度

$$\frac{(1f_1 + 2f_2 + 3f_3 + \dots + 20f_{20})}{N(\Sigma f)}$$

を算出すると Table 2 となる。本表の S. D. 値をみて、アメリカ人、シナ人およびロシア人においてそれが

Table 2 各民族に対する好意度とその順位

民族	男			女			計		
	好意度	S. D.	順位	好意度	S. D.	順位	好意度	S. D.	順位
フィリピン人	12.35	3.92	12	13.42	3.26	14	12.93	3.34	12
トルコ人	12.86	3.84	14	13.39	2.96	13	13.15	3.39	14
フランス人	6.63	4.32	5	5.18	2.80	5	5.86	3.65	5
ビルマ人	12.78	3.36	13	13.25	2.86	12	13.03	3.13	13
スイス人	4.93	3.44	3	4.45	3.22	2	4.67	3.34	2
イギリス人	6.09	4.52	4	4.53	3.62	3	5.26	4.19	4
黒人	13.91	4.52	18	13.77	4.18	16	13.84	4.32	17
インド人	10.42	3.94	9	10.09	4.16	8	10.24	4.06	8
ブラジル人	10.15	4.01	8	11.58	3.57	10	10.86	4.00	10
アメリカ人	8.06	5.28	7	7.31	4.84	6	7.65	5.07	7
インドネシア人	13.52	3.58	17	13.45	2.96	15	13.48	3.30	15
シナ人	14.93	5.48	19	15.35	4.29	19	15.11	5.00	19
イタリヤ人	7.09	3.72	6	7.58	3.60	7	7.36	3.65	6
ロシア人	13.39	5.86	16	13.82	5.16	17	13.62	5.75	16
オーストラリア人	11.30	4.56	11	11.69	3.50	11	11.51	4.03	11
日本人	3.70	4.64	1	3.20	3.38	1	3.43	4.03	1
ユダヤ人	12.97	4.96	15	14.78	3.88	18	13.96	4.49	18
朝鮮人	18.18	2.78	20	17.99	2.92	20	18.08	2.84	20
ドイツ人	4.70	3.98	2	4.67	2.92	4	4.68	3.46	3
アイルランド人	10.81	3.88	10	10.30	3.57	9	10.53	3.72	9
平 均	10.46	4.23		10.49	3.57		10.47	3.94	

男女間の好意度順位の列位相関 $\rho = 0.973$.

Table 3 29年度結果と34年度結果との比較

	男		女		計	
	好意度差	順位差	好意度差	順位差	好意度差	順位差
日 本 人	-1.59	0	-0.96	0	-1.20	0
朝 鮮 人	-1.66	0	-1.43	0	-1.55	0
シ ナ 人	-4.46	-8	-2.18	-7	-3.64	-8
フィリピン人	+2.04	+3	+0.18	+1	+1.17	+3
ビルマ人	-1.34	-3	+0.17	+1	-0.85	-1
インドネシア人	+0.14	-2	+0.96	+1	+0.46	0
イ ン ド 人	-2.15	-2	-1.41	-1	-1.82	-1
オーストラリア人	+3.85	+5	+2.92	+6	+3.44	+5
イ タ リ ー 人	+1.01	0	+0.14	-1	+0.60	0
フ ラ ン ス 人	-0.68	-2	-0.83	-3	-0.50	-2
ス イ ス 人	+1.74	+2	+1.86	+3	+1.94	+3
ド イ ツ 人	+0.63	0	-0.08	-1	+0.38	-1
イ ギ リ ス 人	+0.49	0	+0.23	+1	+0.66	0
ロ シ ア 人	-1.01	-2	-0.51	-4	-1.00	-2
ア メ リ カ 人	+1.41	+1	+1.65	+2	+1.63	+1
黒 人	+1.46	0	+1.24	+3	+1.44	+1
ブラジル人	+1.38	+3	+1.22	0	+1.07	+1
ユ ダ ヤ 人	+2.84	+4	-0.21	-1	+1.39	+1

男子の両年度の好意度順位列位相関 $\rho=0.842$
 女子の “ ” “ ” $\rho=0.856$
 男女合計した場合の “ ” $\rho=0.874$

他に比していちじるしく大きいことに気づくのであるがこの事実の前項であきらかにされたこれら諸民族に対する学生の好意度に以前と異なつたものが生じていることを物語っているといつてよく、なお学生個人によつて相当に好意度に変化のあることを示している。いま、29年の研究と本研究との比較を各民族に対する好意度差および順位差によつて示せば Table 3 のようになる (29年度の研究は18民族であつたので、好意度 $P_2 = \frac{20P_1}{18}$ として換算した)。

両年度における好意度順位列位相関係数は男子で 0.842、女子で 0.856、全体では 0.874 と相関度は予想外に高いので、学生の各民族に対する好意度は時間的経過や社会的国際的事変の変化にもかかわらず、かなり恒常的な永続的傾向のあることが考えられる。この点は Guilford, J. P. (1) や Hartley, E. L. (2) 等の研究結果と一致している。

しかし Seago, D. W. (3), Meenes, M. (4), Gilbert, G. M. (5) 等が太平洋戦争前からその後にかけてのアメリカ人学生の日本人、ドイツ人に対する態度が好意的なものから非好意的なものに推移した模様をあきらかにしているが、本研究においても同様の傾向を例示する

ことができよう。Table 3 から最も顕著なものをあげると、シナ人に対するいちじるしい非好意的態度への推移と、それとは反対にオーストラリア人に対するはつきりした好意的態度への変化である。男子におけるユダヤ人に対する態度もいちじるしく好意的に変つてきている。かかる変化はそれらの民族ないし国民の当方に対する激しい拒否のないし敵対的態度が停止または改善されるとか、逆にかれらの態度が好意的友好的であつたのが、きわめて非好意的拒否的となつてきた場合に起こることが反省される。また他の民族に対する認識の深さ、理解の深さによつてこちらの態度が変化する。ユダヤ人に対する態度の変化などはこれに基づいているものと考えられる。好意度の変化の状況をまとめてみると次のようになる。

ここに一考を要する事実が現われている。それは自国民に対する態度が非好意的な方向に変化していることである。最近の国内情勢は上下あげての勢力争い、各種犯罪の横行、交通禍の激化、ストライキの年中行事化、入学試験・就職試験の激烈化等實際目をおおうべきものがあり、純粋と理想に燃える青年学

より好意的な方向へ変化したもの	順位	より非好意的な方向へ変化したもの	順位	あまり変化していないもの
オーストラリア人	1	シ ナ 人	1	インドネシア人
ス イ ス 人	2	イ ン ド 人	2	ビ ル マ 人
ア メ リ カ 人	3	朝 鮮 人	3	イ タ リ ー 人
黒 人	4	日 本 人	4	フ ラ ン ス 人
ユ ダ ヤ 人	5	ロ シ ア 人	5	ド イ ツ 人
フィリピン人	6			イ ギ リ ス 人
ブラジル人	7			

徒にとつてはことに見苦しく汚らわしい姿に映ずることであろう。「青年よ！ 大望を抱け！」と叫ばれうる希望と光明と誇りを持ちうる日本人に一日も早くなりたいものである。

II 大学生の民族的好意度と民族に対する優劣観との関係

(1) 各民族に対する優劣度の分布状況

各民族に対する優劣度の分布状況を% (各段階毎に $\frac{100f}{N}$ を算出) で示すと Table 4 となる。同表の右方欄にはさらに各民族に対する優劣点の示してあるが、これは +3 の段階に7点を与え、+2には6点、+1には5点、…

Table 4 各民族に対する優劣度分布状況(%)

	+3	+2	+1	0	-1	-2	-3	「わからない」と「無記」	優劣点	S. D.	順位
フィリピン人	— —	— —	4.7 4.0	17.8 6.5	35.5 42.3	27.1 16.3	5.6 1.6	9.3 29.3	2.90	1.53	15
トルコ人	— —	— —	0.9 1.6	17.8 10.6	28.0 25.2	28.0 15.4	1.9 1.6	23.4 45.5	2.87	1.26	16
フランス人	8.4 9.8	12.1 27.6	23.4 35.0	44.9 21.9	5.6 2.4	1.9 —	— —	3.7 3.3	4.96	1.08	5
ビルマ人	— —	— 0.8	1.9 1.6	11.2 10.6	26.3 33.3	35.5 23.6	12.1 4.9	13.0 25.2	2.63	0.95	17
スイス人	10.4 7.3	20.8 23.6	19.8 23.6	35.8 29.3	2.8 6.5	— —	— —	10.4 9.8	4.98	1.00	4
イギリス人	17.0 21.9	23.6 39.8	30.2 28.5	23.6 8.1	0.9 0.8	1.9 —	0.9 —	1.9 0.8	5.51	1.04	2
インド人	— 0.8	2.9 0.8	7.6 5.7	11.4 19.5	31.4 39.8	28.6 21.9	10.5 1.6	7.6 9.8	3.00	1.11	14
ブラジル人	1.0 —	0.8 2.9	4.0 3.8	22.8 16.2	26.8 46.7	17.1 17.1	4.0 2.9	24.4 9.5	3.13	1.03	12
アメリカ人	20.0 15.4	25.7 35.0	22.9 21.0	18.1 17.1	5.7 6.5	1.9 0.8	3.8 0.8	1.9 3.2	5.19	1.37	3
インドネシア人	— —	— —	— —	5.7 11.4	36.3 29.3	34.3 22.8	13.3 5.7	10.5 30.9	2.58	0.84	18
シナ人	1.0 —	1.9 1.0	7.6 4.9	18.1 21.9	30.5 42.3	24.8 13.0	13.3 7.3	2.9 9.8	3.00	0.98	13
イタリア人	1.9 —	4.8 7.3	12.4 13.0	47.6 47.9	18.1 10.6	3.8 1.0	1.0 —	10.5 20.3	4.09	0.92	7
ロシア人	10.5 8.1	16.2 29.3	18.1 17.1	21.9 20.3	13.3 10.6	2.9 4.9	4.8 1.6	12.4 8.1	4.70	1.50	6
オーストラリア人	1.0 —	2.9 0.8	9.5 10.6	32.4 24.4	26.7 19.5	4.8 4.0	1.0 0.8	21.9 39.8	3.72	0.96	10
日本人	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	4.00	—	8
ユダヤ人	7.6 2.4	3.8 2.4	8.6 6.5	16.2 8.9	17.1 28.5	14.3 11.4	4.8 9.8	27.6 30.1	3.40	1.58	11
朝鮮人	— —	— —	2.9 —	6.7 4.0	25.7 37.4	25.7 29.3	33.3 21.9	5.7 7.3	2.21	0.90	19
ドイツ人	35.2 33.3	28.6 34.1	22.9 20.3	11.4 10.6	1.0 —	— —	— —	1.0 1.6	5.92	1.02	1
アイルランド人	1.0 0.8	1.0 —	7.6 9.8	24.8 13.0	16.2 13.0	4.8 —	1.9 —	42.8 63.4	3.80	1.01	9
黒人	1.9 —	— 1.6	— 3.2	6.7 4.0	17.1 18.7	21.9 26.0	45.7 33.3	6.7 13.0	2.03	1.06	20
平均									3.73	1.06	—

上段……男子, 下段……女子

—3段階には1点を与えて, $\frac{7f_{+3}+6f_{+2}+5f_{+1}+\dots+1f_{-3}}{\Sigma f}$ の値を計算したもので, 点数の多いほどよりすぐれていることを示し, また4点以上ならば日本人よりすぐれている, 4点以下ならば日本人より劣つていることを示している。なおこの優劣点, S. D. およびその順位の欄はすべて男女合計したものについてである。後に掲げる Table 5 によつて各民族に対する優劣点に関する男女間の状況をみると, 驚くほどに類似した順位を示していて,

その列位相関係数は実に 0.973 の高さに達している。

そこで Table 4 によつて各民族のもつ優劣点を全体的に考察してみよう。

第1に, 日本人よりすぐれていると評価されている民族は7民族であつて, 優劣点の最高のもので並べてみると, ドイツ人, イギリス人, アメリカ人, スイス人, フランス人, ロシア人, イタリア人となり, ほとんどが非常に好意をもたれている民族である。ただロシア人の

みはその好意度において16位にありながら、優劣度では第6位を占めている。この事実から好意度と優劣度とが完全に一致するとは言いがたいということがわかる。つまり、民族的態度における認識的側面と感情的側面とはだいたいにおいてよく一致するが、といつても常に必らずしもそうではないといえよう。この点に関しては次項でいさ少し詳しく検討することとする。

第2に、日本人より劣つていてと評価されているものは他の12民族であつて、最も劣つていとされているものから列挙してみると、黒人、朝鮮人、インドネシア人、ビルマ人、トルコ人、フィリピン人、インド人、シナ人、ブラジル人、ユダヤ人、オーストラリア人、アイルランド人という順序になる。しかし、オーストラリア人、トルコ人、アイルランド人に関しては「わからない」反応や無記反応が30%以上もあり、特にアイルランド人では53.9%にも達しているの、ここに示された評価点もこの事実を考慮して解釈されねばならないだろう。

またユダヤ人、フィリピン人、ロシア人などに対しては分布がかなり広く分散しており、評価の個人差が大きいということも考慮にいれておく必要がある。

(2) 民族的好意度と優劣度との関係

この問題については前項で一言触れておいたのであるが、まず調査の結果を Table 5 によつてよく観察してみよう。

全体的に両者間のずれの大きいものを調べてみると、Table 5 から次のような結果が得られる。

次に男女における両者の一致度をみると男子では列位相関係数が 0.768, 女子では 0.754 であり、全体では 0.760 であるから一致度はかなり高いといつてよい。しかも男女間における優劣度の列位相関係数は実に 0.973 といういちじるしい一致の傾向がある。

以上の考察から、前にも述べたように、民族的優劣観と民族的好悪感とは相関度はかなり高いが、両者間のずれの大きいものもあるということがあきらかとなつた。

Katz, D. と Braly, K. W. (6) とはすでに25年前に、好意度では第4位にあつたイタリア人が第6位にあつた日本人よりも民族的ステレオタイプにおいて（日本人はこの点で第4位）より非好意的なものであつ

優劣度が好意度よりも高いもの	順位	好意度が優劣度よりも高いもの	順位	両者間のずれの少ないもの
ロシア人	1	日本人	1	フランス人
ユダヤ人	2	インド人	2	イタリア人
シナ人	3	ビルマ人	3	オーストラリア人
アメリカ人	4	フィリピン人	5	アイルランド人
イギリス人	5.5	黒人	5	朝鮮人
ドイツ人	5.5	インドネシア人	5	
		ブラジル人	8	
		トルコ人	8	
		スイス人	8	

たことを指摘し、民族的好悪感と民族的ステレオタイプとが必らずしも一致しないことを示唆している。本研究ではこの点が一層明確に例証されていると考える。

なお筆者がこの調査整理中激しい衝撃を受けた事実を報告しておかなければならない。それは女性の一被験者

Table 5 民族的好意度と優劣度との関係

民族	男			女			計			差
	優劣点	優順劣度	好順意度	優劣点	優順劣度	好順意度	優順劣度	好順意度		
フィリピン人	2.62	16	12	2.93	15	14	15	12		+3
トルコ人	2.84	15	14	2.91	16	13	16	14		+2
フランス人	4.66	5	5	5.21	4	5	5	5		0
ビルマ人	2.48	17	13	2.77	17	12	17	13		+4
スイス人	5.00	4	3	4.96	5	2	4	2		+2
イギリス人	5.23	2	4	5.75	3	3	2	4		-2
黒人	1.94	20	18	2.11	20	16	20	17		+3
インド人	2.85	14	9	3.13	11	8	14	8		+6
ブラジル人	3.15	12	8	3.11	13	10	12	10		+2
アメリカ人	5.16	3	7	5.80	2	6	3	7		-4
インドネシア人	2.38	18	17	2.67	18	15	18	15		+3
シナ人	2.91	13	19	3.07	14	19	13	19		-6
イタリア人	3.99	8	6	3.83	9	7	7	6		+1
ロシア人	4.55	6	16	4.81	6	17	6	16		-10
オーストラリア人	3.73	9	11	3.70	10	11	10	11		-1
日本人	4.00	7	1	4.00	7	1	8	1		+7
ユダヤ人	3.71	10	15	3.12	12	18	11	18		-7
朝鮮人	2.15	19	20	2.25	19	20	19	20		-1
ドイツ人	5.92	1	2	5.92	1	4	1	3		-2
アイルランド人	3.67	11	10	3.98	8	9	9	9		0
平均	3.65	a	b	3.81	c	d	e	f		

ab間の列位相関	$\rho=0.768$
cd間	$\rho=0.754$
ef間	$\rho=0.760$
ac間	$\rho=0.973$

(18才)が質問の第1・第2項に対して無回答のうえ、欄外に次のようにきわめて激しい口調でこのような調査に対する異議を訴えていたということである。

「外国人についての知識はほとんどといっていいくらいないわれわれになぜこのようなことがわかるでしょう。優劣だなどと、いつたい何を基準としてのことなのか？」と。こうした異議については奇しくも Gilbert, G. M. (7)が大学生について行なつた民族的ステレオタイプの調査の際にも多数の学生から寄せられたことを報告している。

Ⅲ 民族的好意と人格の構造との関係

この問題については Adorno, T. W. ら (8) があつた「The Authoritarian Personality」を公けにして以来さかんに研究されるようになった。そして人種中心主義と権威主義とが密接に関連していることをあきらかにしてきている。しかし最近、人種中心主義とは反対方向の外国人に対する好意的態度を中心とした研究に関心の中心が向けられてきた。たとえば Perlmutter, H. V. (9) は外国人や外国文化に強い好意的態度をもっているものはそうでないものよりも有意的に権威主義的であることをあきらかにしており、このような外国びいきの強いものは根本的には権威主義的な傾向の強いものと同一の人格の力学構造をもっていると考えた。また Brodbeck, A. J. (10) は外国人や外国文化に強い好意をもつものはその反対のものよりも自己嫌悪感がより強い傾向のあること、および権威主義的傾向の強いものも弱いものよりも自己嫌悪が強いことを報告している。そしてこうした自己嫌悪感、自信感とか自尊心感が人生初期における健康的な親子関係から生ずるのに反し、不幸な親子関係から起こると考える。さらに直接的な親の否定的拒否的態度によつて生じた自己嫌悪感の補償機制として内集団との強い同一化現象が起こり、これが民族的態度としては人種中心主義の人間を形成する。これに反し、同一化すべきモデルとして親が不適当である場合には、自己嫌悪感を外集団との同一化によつて除こうとし、これが外国びいきの態度として現われると考えるのである。こうしてかれは異なつた親子間の葛藤から生ずるとはいえ同じ自己嫌悪感を抱くものが一方では人種中心主義の人格となり、他方それとは正反対の外国びいきの人格となることを論じている。

筆者は Brodbeck, A. J. の所論に刺激されて、偏見の人格と外国びいきの人格と自己嫌悪感との3者の関係を明かにしようと意図した。

この場合、外国びいきの人格 (Xenophilic Personality 略して XP) とは質問紙第1項の調査において日本人に

対し第7位以下に順位づけたものとし、上・中・下3群に分類する。偏見の人格 (Prejudiced Personality 略して PP) とは質問紙第4項の2以下に反応したものとし、偏見点を算出するために、5点尺度法を用い、1に1点2に2点……というぐあいに採点した。自己嫌悪感については質問紙第3項を6点尺度として、1に6点、2に5点……というぐあいに採点して自己嫌悪点を算出した。

なお民族に対する優劣観を数量化するために質問紙第2項を7点尺度とし、+3は7点、+2は6点、……、-1は1点として計算して優劣点を求めた。また被験者の中に無記反応が約15%近くあつたので、これらを除いて結果を考察することにした。

(1) XP は優劣点・自己嫌悪点・偏見点において、どのような傾向を示したか。

この問題に関して調査結果を整理すると Table 6 のようになる。外国びいきの傾向のいちじるしいもの、中程

Table 6 男子学生

	数	優劣点	SD ²	自己嫌悪点	SD ²	偏見点	SD ²
上	19	3.86	3.944	4.68	1.547	1.16	0.448
中	19	3.78	4.021	4.42	1.298	1.68	0.532
下	51 (89)	3.47	3.641	3.94	3.373	1.49	0.287
平均		3.61	4.085	4.20	1.600	1.46	0.361
有意水準		0.01		0.01		0.01	

女子学生

	数	優劣点	SD ²	自己嫌悪点	SD ²	偏見点	SD ²
上	16	4.03	4.744	4.88	0.494	1.38	0.359
中	43	3.91	3.626	4.51	0.856	1.35	0.226
下	53 (112)	3.85	2.111	4.66	1.168	1.43	0.661
平均		3.89	3.141	4.63	0.964	1.39	0.450
有意水準		0.01		0.01		0.20	p>0.10

男女計

	数	優劣点	SD ²	自己嫌悪点	SD ²	偏見点	SD ²
上	35	3.94	4.616	4.77	0.867	1.26	0.392
中	62	3.87	3.779	4.48	0.992	1.45	0.344
下	104 (201)	3.66	3.452	4.31	1.558	1.46	0.499
平均		3.77		4.41		1.42	
有意水準		0.01		0.01		0.01	

度のもの、低いもの(順位づけで第1位としたもの)に分類して各成績における上下両群の差を t-test してみると、女子学生における偏見点の場合を除いてすべて0.01水準以上において有意差がある。

これによつてみると、外国びいきの傾向の強いものは

ど、その弱いものよりも優劣点・自己嫌悪点においてより高い成績をとり、嫌悪点においてはより低い成績をとる傾向のあることがわかる。ただ女子学生の場合、偏見点については前述の傾向がはつきり有意的には出ていない。

なお、優劣点・自己嫌悪点および偏見点のそれぞれについて男女の成績の有意差を t-test すると、いずれの場合にも 0.01 水準以上において有意差があり、女子は優劣点・自己嫌悪点において男子より高い値をとり、偏見点においてより低い成績をとる傾向を見出すことができる。

次に前にも考察したように、民族的好悪感と民族的優劣観とは必ずしも一致しないが、それでも本調査では 0.750 以上の相関があつたのであるから、今の結果を優劣点の分布から被験者を分類して比較してみたら、おそらく同様の結果が得られるのではないかということが予想されよう。この目的でまとめたものが Table 7 である。

Table 7 男子学生

	数	優劣点	自己嫌悪点	SD ²	偏見点	SD ²
上	23	4.39	4.61	1.401	1.22	0.170
中	31	3.75	4.65		1.48	
下	35 (89)	2.97	3.23	1.622	1.60	0.526
平均		3.61	4.20	1.674	1.46	0.361
有意水準			0.01		0.01	

女子学生

上	39	4.47	4.77	0.664	1.33	0.163
中	41	3.84	4.51		1.37	
下	33 (113)	3.28	4.67	0.944	1.48	0.777
平均		3.89	4.65	0.972	1.39	0.450
有意水準			0.01		0.01	

男女計

上	62	4.44	4.71	1.109	1.29	0.335
中	72	3.80	4.57		1.42	
下	68 (202)	3.12	4.07	1.092	1.54	0.601
平均		3.77	4.41		1.42	
有意水準			0.01		0.01	

これをみると、優劣点で高い点をとつたものほど、そうでないものよりも自己嫌悪点においてより高い成績をとり、偏見点においてより低い点数をとつていことが明瞭に看取される。そしてこの場合には女子学生においてもはつきり優劣点の高いものは低いものに比して偏見点が低いことを示している。

以上の考察から次のことを一応いうことができるであろう。すなわち、

XP は自己嫌悪の傾向がいちじるしい、そして偏見的な傾向は弱いという特徴をもっている。

(2) PP は自己嫌悪点や優劣点においてどのような傾向を示すか。

この目的で整理された結果が Table 8 である。ここで

Table 8 男子学生

	数	偏見点	自己嫌悪点	SD ²	優劣点	SD ²
上	37	2.12	4.30	1.450	3.46	1.157
下	52 (89)	1.00	4.12	1.757	3.71	1.375
平均		1.46	4.20		3.61	
有意水準			0.01		0.01	

女子学生

上	36	2.22	4.89	0.862	3.80	0.792
下	77 (113)	1.00	4.56	0.998	3.95	1.067
平均		1.39	4.65		3.89	
有意水準			0.01		0.01	

男女計

上	73	2.16	4.56	1.233	3.63	1.071
下	129 (202)	1.00	4.38	1.352	3.85	1.209
平均		1.42	4.41		3.77	
有意水準			0.01		0.01	

上位群とは質問紙第 4 項の 2 以下に反応したグループであり、下位群とは 1 に反応したグループである。本表から偏見点の高いものは低いものよりも、自己嫌悪点が高く、優劣点において低い点数をとる傾向のあることが伺い知られるであろう。したがって、

PP も自己嫌悪の傾向が強い。しかし、外国びいきの態度は弱いという特徴がある。

ということができるようである。それでは、自己嫌悪の強弱によって被験者を上中下 3 群に分類したら、上下両群間にどのような差が認められるであろうか。

この角度から結果を整理しなおしてみると Table 9 のようになる。これをみると、自己嫌悪点の高いものは低いものに比して、優劣点においても、偏見点においてもより高い傾向をもつということがいえよう。この傾向は男女のいずれの場合にも同様に現われている。

この事実は自己嫌悪の強いものには外国びいき的性格の強いものと偏見的性格の強いものとが含まれていることを示しているといつてよい。

Table 9 男子学生

	数	自己嫌悪点	優劣点	SD ¹	偏見点	SD ²
上	38	5.37	3.82	1.199	1.50	0.327
中	40	3.75	3.56		1.45	
下	11 (89)	1.73	3.03	0.659	1.36	0.232
平均		4.20	3.61		1.46	
有意水準			0.01		0.01	

女子学生

上	65	5.35	3.96	0.922	1.46	0.558
中	44	3.84	3.80		1.30	
下	4 (113)	2.00	3.75	0.956	1.25	0.187
平均		4.65	3.89		1.39	
有意水準			0.02 > p > 0.01		0.01	

男女計

上	103	5.36	3.91	1.028	1.48	0.463
中	84	3.80	3.68		1.37	
下	15 (202)	1.80	3.23	1.099	1.33	0.222
平均		4.41	3.77		1.42	
有意水準			0.01		0.01	

ところで、Brodbeck と Perlmutter(11) とは自己嫌悪は Xenophilic Personality とも Authoritarian Personality と関連をもっていることをあきらかにし、この傾向が女子学生より男子学生においてよりいじりしいと述べている。また Perlmutter(12)はこれら2つの Personalities はその民族的態度において論理的には両極的でありながら、基本的には同一の人格性力学をもっていることを究明している。そして Authoritarian Personality と Ethnocentric Personality (自国民びいきの性格の強いもの)と密接に関連していることはすでによく知られてきているのであるから、結局これら3つの Personalities は同根をもった異なつた形の枝葉の姿に過ぎないものであるということが出来る。

こう見てくると、われわれの研究結果もこれを総合的に考察してみると、外国びいきの性格と偏見の性格とは本来同様の人格性力学をもつたものであつて、自国民と他国民とを強く差別する点では共通しているものであるといつてよい。それならば外国びいきの性格の強いものはやはり偏見点が高いはずであるのに本研究では予想外に低い結果となつているのはなぜだろうか。Perlmutter は Xenophiles が権威に対して抱いている反感・不信・敵意・攻撃を自己防衛過程によつて間接的投射的に解決しようとするものであることをあきらかに論じているが

偏見点が期待に反して低いという事実もじつはかれらが外国びいきの傾向や態度を隠蔽し、自国民を嫌つて他国民を好むことに対する人間的罪悪感から逃れようとする自己防衛過程としての逆反応を意味しているのではあるまいか。この点について Perlmutter も Xenophiles は抽象的に人間性を愛し、意識的に Humanitarians となつていると考えるといつては、偏見点の低い結果が無意識的機制によるものか意識的活動によるものかについてはさらに考究を要するところであると思う。

IV 要 約

われわれは民族的好悪とその人格性要因に関する問題について男女 232名に対して行なつた調査結果を考察してきたが、いまその主要な点を要約し列挙してみることとしよう。

- (1) 大学生の民族的好悪の状態は5年前の調査結果と比較して0.874という高い相関があり、かなりの一致性がみられるが、特にシナ人・インド人・朝鮮人に対しては一方向に、オーストラリア人・スイス人・アメリカ人に対しては十の方向にかなりいじりしい変化をきたしていた。
- (2) 民族的好悪感と民族的優劣観とは0.760の相関を示し、相当の一致性のあることがわかつた。しかし、ロシア人・ユダヤ人・シナ人・アメリカ人においては好悪感よりも優劣観においていじりしく十であり、これに反し日本人・インド人・ビルマ人・フィリピン人・黒人に対してはいじりしく一であることが注目された。
- (3) 民族的好悪と人格性要因との関係については、
 - (i) 外国びいきの性格の強いものはそうでないものよりも優劣点・自己嫌悪点が高い、偏見点においてより低いという傾向が顕著にみられた。しかし偏見点が彼等においてより低いということは外国びいき自厚げらいという人間的罪悪感から逃れるためのかれらのとる自己防衛手段の現われではないかと察せられる。
 - (ii) 偏見の性格の強いものはそうでないものに比して優劣点が高い、自己嫌悪点が高いという傾向が明瞭に看取された。
 - (iii) 自己嫌悪の強いものはそうでないものよりも優劣点も偏見点も高いという傾向がはつきりうかがわれた。
 - (iv) したがつて、外国びいきの性格の強いものも偏見の性格の強いものも基本的には同一の人格性力学をもつた2つの異なつた姿であると見られる。

文 献

- (1) Guilford, J. P. : Racial preferences of a thousand American university students. *J. soc. Psychol.*, 1931, 2, 179—204.
 - (2) Hartley, E. L. : Problems in prejudice. New York; King's Crown Press, 1946.
 - (3) Seago, D. W. : Stereotypes : Before Pearl Harbor and after. *J. Psychol.*, 1947, 23, 55—63.
 - (4) Meenes, M. : A comparison of racial stereotypes of 1935 and 1942. *J. soc. Psychol.*, 1943, 17, 327—336.
 - (5) Gilbert, G. M. : Stereotype persistence and change among college students. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1951, 46, 245—254.
 - (6) Katz, D. & Braly, K. W. : Racial prejudice and racial stereotypes. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1935, 30, 175—193.
 - (7) Ibid.
 - (8) Adorno, T. W. ; Frenkel-Brunswik, E. ; Levinson, D. J. & Sanford, R. W. : *The Authoritarian Personality*. New York : Harper, 1949.
 - (9) Perlmutter, H. V. : Some characteristics of the xenophilic personality. *J. Psychol.*, 1954, 38, 291—300.
 - (10) Brodbeck, A. J. & Perlmutter, H. V. : Self-dislike as a determinant of marked ingroup-outgroup preferences. *J. Psychol.*, 1954, 38, 271—280.
 - (11) Ibid.
 - (12) Ibid.
- (葛谷隆正：諸民族に対する好悪の態度の研究. 教育心理学研究, 1955, 3, 50—57.)

(1959年10月5日原稿受付)

ABSTRACTS*

STUDY ON STEREOTYPES AND PREFERENCES AMONG JAPANESE STUDENTS TOWARD THEMSELVES AND OTHER NATIONAL AND ETHNIC GROUPS

by

Haratani, T.; Matsuyama, Y.; Minami, Y.

Osaka University of Liberal Arts and Education

The study of ethnic stereotypes is currently popular among the social psychologists. The present study has attempted to assess how Japanese students, in Osaka City verbalize images of themselves as a national group and images of eleven other foreign peoples who were expected to be valuable for a critical comparison. These eleven national and ethnic groups were American, British, Chinese, French, German, Indian, Italian, Jewish, Korean, Negro and Russian.

The entire procedure was modeled mainly after the procedure used by Katz and Braly. The first five traits selected out of 100 adjectives by the subjects consisting of three sampled groups (129 middle school students, 94 high school students and 70 college students) were given in order of percentage to indicate each stereotypy weight. Average index of stereotype consistency computed on each

sample group was .24, .28 and .26 respectively.

The authors have considered about a relationship between stereotypes and prejudiced attitudes in terms of the ranking order assigned to these national and ethnic groups. The next two contrasting facts should be noted: A) Japanese students rank their own group at the top of preference ordering but reflect many unfavorable traits upon their self-attribution. B) Koreans are assigned to the bottom of preference ranking.

In summary, the following two comments have been drawn from this study: i) The lower indices of stereotype consistency found in these data might be understood that they reveal either differentiated or indifferent ethnic attitude in Japanese students. ii) Some inferiority-complex characterizing the self-attribution of these Japanese students might be projected in their Korean stereotypes.

INTERRACIAL PREFERENCES AND THEIR PERSONALITY DETERMINANTS

by

Kuzutani, Takamasa

Kumamoto University

This study aimed to compare the survey results on the interracial preferences of the university stu-

dents who attended in 1954 with those in 1959, in order to explore the conformity of interracial pre-

* We owe editing of English abstracts in this issue to Dr. Ray Simpson of the University of Illinois.

ferences to interracial evaluation of superiority or inferiority, and the relation between the interracial preferences and the personality determinants.

One hundred and six male and one hundred and twenty-six female students in the Faculty of Education of Kumamoto University were the respondents to the questionnaires made to indicate a degree of preference toward the twenty different races. To evaluate interracial preferences, subjects were asked to compare each race with the Japanese race on a 7 point scale. Then subjects were asked to rate their feelings of self-dislike on a 6 point scale and to select the most suitable opinion among five choices.

The results were as follows:

(1) There was a high correlation of 0.874 between the interracial preferences conceived by the university students investigated in 1954 and those in 1959. But considerable changes in preferences were revealed in a negative direction toward the Chinese, the Indians, and Koreans, and in a positive direction toward the Australians, the Swiss, and the Americans.

(2) The correlation coefficient of the interracial preferences with the interracial evaluation of superiority was 0.760. The Russians, the Jews, the Chinese and the Americans, however, were rated remarkably higher in superiority evaluation than in preference; however, the Japanese, the Indians, the

Burmese, the Philipinoes and the Negroes showed higher preference than superiority evaluation. Thus, the interracial preferences and the interracial stereotypes have not always consistently appeared correlative.

(3) On the relation between the interracial preferences or the interracial evaluation of superiority and the personality determinants, the following tendencies have been found:

(a) Individuals who ranked Japanese at the 7th step in the scale or below in preferences have tended to score higher both on the racial evaluation scale and on the self-dislike scale, but lower on the racial prejudice scale, than those who did not.

This second tendency seems to be due to the results of the defensive processes by which they may escape from their guilty feelings regarding xenophilic attitudes as opposed to the domestic.

(b) Those who obtained higher scores on the prejudice scale were higher on the self-dislike scale and lower on the racial evaluation scale.

(c) Those who obtained higher scores on the self-dislike scale were higher both on the racial evaluation and on the prejudice scale. These results lead us to the conclusion that there may be a certain similar underlying personality dynamics between the xenophilic and the prejudiced.

FACTOR-ANALYTICAL STUDIES OF PICTURE-FRUSTRATION STUDY

by

Kuba, Tadatoshi

Yamaguchi University

The first aim of this investigation is to find out how the frustration of children changes annually in quality in the same child. The second aim is to find out the form of reaction or response and the direction of aggression by factor analysis. The Picture Frustration Study was administered to primary school children when they were in the 3rd, 4th, and 5th

grades.

Following are the results obtained:

(1) The form and direction of frustration changes from Extrapunitiveness to Intrapunitiveness or Impunitiveness as the age increases.

(2) The factor analysis results indicate Extrapunitiveness responses disappear as age increases.